

中瀬有紀

諸行無常



© Yuki Nakase

Land Me at Vans House Parties

「諸行無常」とは、なんとも美しく、なおかつ非常に理にかなった言葉だなど、改めて仏教を含む東洋の文化に敬意を表します。

照明デザインという職業も、常に変化し続けています。ルネサンス時代の劇場で蝋燭による舞台照明が誕生したものの、照明を扱う人は「照明係」でしかなく、19世紀末前後にリヒャルト・ワーグナーのオペラ公演で光の重要性を主張したスイス出身のAdolphe Appiaは美術デザイナーでした。アメリカで照明デザイナーという仕事が定着したのは1930年代にマーサー・グラハム・カンパニーのテクニカル・アシスタントとして雇われたJean Rosenthalが照明デザイナーとして活躍するようになった頃からです。

1930年代と言えば照明器材に大きな変化がありました。1933年にCentury Lighting(後のStrand Lighting)の創設者Joseph LevyとEdward Kookがエリプソイダル・リフレクター・スポットライトを発明し、両者の名前をとって『Leko』と名付けました。リコの後継として1992年に誕生したのがElectronic Theatre ControlsのSource Fourであり、LevyとKookのアイデアは発案から80年過ぎてもアメリカ舞台照明界で最大シェアを誇ります。

器材の移り変わりに大きな影響を受けるのも、照明デザインの特徴です。近頃はMole-Richardson Co.の200W JuniorLED Dayliteを家庭用コンセントから電気を供給して使用できる時代です。Cineoからは2kw白熱電球ソフトライトに匹敵する明るさを確保するTruColor HSが登場し、Kino Floからは調光と色温度調節を非常になめらかに行うことができる1kw白熱電球ソフトライトよりも高いルーメンのCeleb 400 DMX LEDが10月から市場に出ます。そしてLED器材の浸透により照明デザイナーが新調すべきは、照度計です。UPRtekのLEDメーターMK350のように、照度だけではなく色温度と演色性も同時に測定できる照度計が必要不可欠になりました。

英語は主語を省略して文章を構成することが日本語と比べて圧倒的に少なく、「私」を意味する単語「I」を日常的に使用します。それにより「私」という実体的な「我」を想定しやすく、自身の成長と変化の経歴をとらえて「私」は「私」であると考えやすいように感じます。しかし「諸行無常」の世においては、「私」は自己として存在しているのではなく関係そのものとして生かされているのではないのでしょうか。自身や周囲の変化とともに命を維持し、歴史を後生へ繋ぐのが現役の務めだと思います。